

蜘蛛の糸

芥川龍之介

青空文庫

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちを、独りでぶらぶら御歩おしやくさまきになつていらつしやいました。池の中に咲はいている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色きんいろの蕊ずいからは、何とも云えない好よい匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居あります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇おたたずみになつて、水の面おもてを蔽おほっている蓮の葉の間から、ふと下の容ようす子を御覧ごらんになりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄じごくの底に当あつて居ありますから、水晶すいしやうのような水を透すき徹てつして、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度覗のぞき眼鏡がねを見るように、はつきりと見えるのでございします。

するとその地獄の底に、韃陀多かんだたと云う男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この韃陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございします。と申ましますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路

ばたを這はつて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しました。が、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませう。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮しらばすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろしなさいました。

二

こちらただは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多かんとでございませう。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き

上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐い針の山の針が光るのでございませうから、その心細さと云つたらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつく微かすかな嘆たんそく息ばかりでございませぬ。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまさまな地獄じごくの責苦せめくに疲れはてて、泣声を出す力さえなくなつてゐるのでございませう。ですからさすが大泥坊の韃陀多も、やはり血の池の血に咽むせびながら、まるで死にかかつた蛙かわずのように、ただもがいてばかり居りました。

ところがあつた時の事でございませぬ。何気なにげなく韃陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛くもの糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませぬか。韃陀多はこれを見ると、思はず手を拍うつて喜びました。この糸に縋すがりついて、どこまでもものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ごございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ませう。そうすれば、もう針の山へ追おい上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思ひましたから韃陀多かんだたは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございませぬから、こう

云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦^{あせ}って見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中^{うち}に、とうとう韃陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまうました。そこで仕方がございせんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れせん。韃陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、^{かずかぎり}数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻^{あり}の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございせんか。韃陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦^{ぼか}のように大きな口を開いたま^あま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断^きれそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数^{にんず}の重みに堪える事が出来ましよう。もし万一途

中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございませぬ。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底からうようよと這い上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこで韃陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚きました。

その途端でございませぬ。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に韃陀多のぶら下つている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから韃陀多もたまりませぬ。あつと云う間もなく風を切つて、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございませぬ。

三

御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちに立つて、この一部始終しじゆうをじつと見ていらつしやいましてが、やがて韃陀多かんだたが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、韃陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相當な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまつたのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓とんじやく着ちやく致ししません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足おみあしのまわりに、ゆらゆら萼うてなを動かして、そのまん中にある金色の蕊ずいからは、何とも云えない好い匂よが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居ります。極楽ももう午ひるに近くなつたのでございましょう。

(大正七年四月十六日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971（昭和46）年3月～11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2011年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜘蛛の糸

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>